

《博士論文要旨および審査報告》

田中禎昭 古代地域社会と年齢秩序

—人口・集団・土地支配—

——学位請求論文——

I 論文要旨

田中禎昭

本論文は、7世紀から9世紀にかけての古代地域社会に焦点をあて、その権造について年齢（世代）原理およびそれに基づいて構成される年齢（世代）秩序という、従来、ほとんど注目されることのなかった視点からの解明を試みるとともに、それに対して律令国家がいかなる支配構造を生み出したのかという問題に、戸籍（人身支配）と土地支配の両面からアプローチすることを目的としている。

まず序章では、本論文の方法と課題を明確にするため、石母田正の在地首長制論以来の古代地域史の研究史について、そのプロブレマティックの理論的整理を試みた。今日の研究の土台を構成する在地首長制論・村落首長制論・農業共同体論・国家的奴隷制論という1970～80年代に提起された諸理論は、いうまでもなく下部構造＝生産・所有関係が土台となり階級関係と国家を規定するととらえる点で共通した特徴をもち、そこには社会構成体論という「戦後古代史学」を規定し続けた「知の枠組み」が貫徹している。その代表的理論である（在地・村落）首長制論は一次的生産関係を（在地・村落）首長—民（戸・家）というタテの支配—従属関係のなかに見いだす言説であったため、地域住民相互のヨコの集団結合はその日常生活諸機能の存在が指摘されることはあっても、自立性の乏しい首長制「内部」の問題としてネガティブに評価されざるを得なかった。したがって古代地域社会をとらえる理論構築の可能性は、(A) 日常性と生存にかかわる、地域社会の住民相互が構成する多様な集団結合とその共同諸機能の存在を解明し、(B) 各々の集団結合と各レベルの首長との関係を生産関係・所有関係から意味づける社会構成体論の「知の枠組み」を前提とせずに把握するという、新たな試みのなかから生まれてくるはずである。

そこで本論文では、シャンタル・ムフ、エルネスト・ラクラウの言説形成体論

を手がかりに、「戦後古代史学」を拘束してきた社会構成体言語を理論的に相対化する方法を模索するとともに、具体的な検討では、人類学のなかで血縁（親族関係）・地縁と並び、「未開社会」の集団結合原理として研究が進んでいる年齢原理に注目する必要性を指摘した。特に H・クノーに始まる世代階層制社会論は、双方的親族関係に基づく日本古代の地域構造をとらえる上できわめて有効な枠組みになり得ると考えられる。

第Ⅰ部～第Ⅲ部の本論は、言説形成体論・世代階層制社会論を理論的基礎として、年齢原理に基づく地域社会の集団構造と、その編制を図る国家支配の論理について検討を試みたものである。

まず第Ⅰ部では、地域社会の諸集団が律令国家のいかなる言説秩序により編制されていたかという課題に、編戸に貫徹する年齢原理の解明を通して迫った。第一章・第二章は、第三章で本格的にとりあげる編戸と年齢原理とのつながりを論じる前提として、偽籍論によって疑われている戸籍にみえる年齢情報の信憑性問題について、統計学的方法を駆使して検証を試みた論文である。戸籍の年齢人口値が示す傾向を統計学的に分析し、年齢人口の偏差の背景にある自然的・人為的要因を明らかにした。また第一章では社会の年齢構造を規定する背景として環境論的要因の存在を合わせて指摘した。

第三章は、本論文の中核をなす部分で、編戸に貫徹する年齢原理を析出し、地域社会に存在した年齢（世代）階層的秩序と国家による戸籍編制とがいかに関わっていたのかという問題について、養老五年（721）下総国戸籍にみられる親族呼称と年齢との相関性の統計学的分析により解明を目指したものである。40・41歳を境界年齢として、その上の「老人—配偶者」世代を「戸主—「妻」（刀自）」とし、その下の世代の戸口成員を監督・指導させるという構造が戸籍からうかがえ、年齢（世代）原理に基づく村落支配を律令国家が採用していた事実を明らかにした。

また補論では、乳幼児の戸籍編制の問題から、5・6歳を移行年齢として7・8歳が境界年齢と位置づけられていた点を指摘した。

第Ⅱ部は、地域社会の年齢（世代）秩序の内容・特徴を分析し、その性格の解明を試みたものである。まず史料上にみえる「ヨチ」（第一章）、「友」と「ドチ」（第二章）の語に注目し、それらが「朋類関係」（「ヨチ」）あるいは「同輩結合」（「ドチ」）という、双方的・世代階層制村落にみられる「同輩集団」としてとら

えられることを述べ、7・8世紀地域社会における年齢集団の実在とその歴史的性質を論じた。「ヨチ」「ドチ」の同輩性、同心性、「友」関係、擬制的「兄弟」関係、仲間同士の婚姻互助・承認機能は、すべて世代階層制村落における「朋類関係」・「同輩結合」という集団類型と適合的である。古代村落社会においては、「ワラハ」「ヲトコ」「ヲトメ」の世代のなかで複数の「同輩集団」=「ヨチ」や「ドチ」が重層的に積み重なり、41歳以上の「オキナ」「ヲミナ・オウナ」の老人世代によって監督・指揮されていたと考えられる。それは親族と友人の区別なく親密な人間関係が構築される、インフォーマルで、非定型的な社会集団であった。

また第Ⅰ部で指摘した40・41歳境界年齢原理に基づく編戸は、このような地域社会における世代階層的秩序に添ったかたちで進められたと考えられる。国家は、40歳代以上の長老が指導・監督する古代村落の世代階層的秩序を公的制度として位置づけず、編戸により個々の長老男女（戸主+「刀自」的女性）の「政」務執行対象を最大三等親（イトコ）までの親族関係者に限定した。この措置により、地域社会は世代階層的秩序を維持したまま、戸（三等親内親族集団）のラインに沿ってタテ割に分断されることとなったのである。世代階層制村落が住民相互の連帯にもとづき国家から「自立」した存在として発展する道は、人為的な編戸の分断効果により未然に抑止されたと考えることができる。

第三章は、「サト」についての論考である。従来、『万葉集』にみえる「サト」は歌語とみるのが通説だが、テキストの検討からそれだけでは文脈を理解できないことがわかる。「サト」は、古代村務の属性として、（村落）首長制的支配秩序を表す「村」、国家的支配秩序を表す「里」（里制の里）と区別され、世代階層制に基づく互助的集団秩序を表す呼称として呼び分けられたものと考えられる。また「サト」は、「朋類関係」「同輩集団」が形成される土台をなす社会集団である。地域社会における「サトビト」の「人言」「人目」に関わる史料は、「サト」内での男女の婚姻を推奨する婚姻規制にかかわり、それは外婚は排除されていないが原則として地域内婚が強く推奨される婚姻形態を意味している。世代階層制村落は内婚制社会に特徴的なものであるが、第三章の分析結果はそれを傍証するものとなるだろう。

第四章は、地域社会における老人観をてがかりに、古代老人の存在形態の解明を課題としたものである。老人世代を神聖視する慣習法的イデオロギーとしての「太古の違法」「オキナさび」をとりあげ、「サト」=村落の外部的存在としての「老」

という老人観の存在とその意味について考察した。

第Ⅲ部は、第Ⅰ部・第Ⅱ部で論じた地域社会（「サト」）の世代階層的構成を分断する戸の創出が、いかなる条件のもとで可能になったのかという問題を、班田収授制の施行手続きを手がかりに考察することを課題としている。班田制の施行手続きは八世紀半ばに大きく変容を遂げ、この過程を考察することにより、各段階における律令国家の土地支配の具体的目的と戸籍支配との関係がみえてくる。そして、それを通して、課題となる「戸政」単位＝戸の創出条件についてひとつの見通しを示すことが可能になるであろう。

第一章では、班田手続きを示す基本史料と位置づけられてきた田令班田条と延喜民部省式校田・班田条を検討し、後者が八世紀中葉に遅れて成立した事実とその意味について明らかにした。その上で、第二章・第三章において、延喜民部省式の班田手続きの中核をなす「諸国校田」制の施行状況を「正倉院文書」に収める東大寺領荘園関連文書と開田図（越前国・糞置村開田地図）を通して探り、班田制の変質と地域社会構造の変容過程を論じた。

八世紀前半期における班田手続きは、延喜氏部省式に定着している「諸国校田」制に欠いている。したがってそれは、既存の固定化された公田を均等に口分田として割り当てていくだけの「屯田制的原理」（吉田孝）に一元化されたシステムであり、国家は、八世紀前半期においては戸内の誰に口分田を班給するかという具体的問題には介入せず、戸の中に生きていた世代階層面秩序に基づき戸主層から戸口へ口分田が行き渡るように図っていたと推察される。なお墾田開発による水田の拡大が想定されていないのは、第Ⅰ部第一章で明らかにした当該期の気候寒冷化により稲作が困難であったという環境史的背景が存在するかもしれない。

しかし八世紀中葉以後、気候温暖化を背景に墾田拡大＝開発の時代に入ると、初期荘園などの有力な墾田経営のもとへの浮浪・逃亡が激化し、従来の世代階層制村落は崩壊過程に入ったものと推察される。それゆえ、戸の集団秩序に依存した班田システムは改められ、律令国家は田図を活用した「諸国校田」制を通して、国家が直接土地を管理する新しい班田制が八世紀後半に成立したと考えられるのである。

Ⅱ 審査報告

(主査) 専修大学文学部	教授 矢野 建一
(副査) 専修大学文学部	教授 荒木 敏夫
(副査) 専修大学文学部	教授 土生田純之
(副査) 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻	教授 仁藤 敦史

田中禎昭氏より専修大学大学院文学研究科歴史学専攻に対して提出された学位(博士)請求論文『古代地域社会と年齢秩序—人口・集団・土地支配—』は、 $1200 \times 374 = 448800$ 字からなる長大なものであった。

審査委員会は、提出された本論文を課題設定の妥当性、方法論の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、史・資料批判の妥当性、学会への貢献度などの諸点を中心に審査を行った。

また、公開の口述試験において、直接、請求者本人に対して審査諸点について質問し、判断材料をえた。

(1) 課題設定

学位請求論文は、7～9世紀の古代日本地域社会論において、これまで古代史研究に多大な影響を与えてきた「首長制論」(在地・村落)・農業共同体論・国家的奴隸制論等を批判し、(A) 日常性と生存のために住民相互が構成する多様な集団結合とその共同諸機能の存在を明らかにするとともに、(B) 各々の集団結合と各レベルの首長との関係をあえて生産関係・所有関係からではなく、正倉院に残る古代戸籍の年齢累積・境界年齢・偽籍論、乳幼児・子供の編戸形態などの年齢原理(Ⅰ部第1章～補論)を分析し、あわせて『万葉集』などにみられる「ヨチ」・「ヲトコ」・「ヲトメ」・「サト」等から古代村落における結合原理を抽出。両者を対置することによって古代地域社会の全貌を明らかにしようとしたものである(第Ⅱ部第1～4章)。これは当該分野の研究においてほとんど顧みられることのなかった新たな視点からの挑戦であり、戦後古代史学をリードしてきた首長制論を相対化するのみならず、その課題設定において、研究史的にも新しい取り

組みであると評価することができる。

(2) 研究方法

方法論的にはふたつの新たな論理を導入している。

①第一に、今日までの古代地域社会論が、首長制論及びその批判的論理いずれにおいても、社会構成体論にもとづく「戦後古代史学」の枠組みに基づく研究史を構成しているのにし、シャンタル・ムフ、エルネスト・ラクラウを中心にしたポスト構造（マルクス）主義による理論的批判を踏まえながら、その方法的な転回を意図している点に、単に実証的批判にとどまらない根源的な方法的思考の努力がうかがわれる。

②第二に、人類学・民俗学で提起された世代階層制村落論の日本古代地域社会の構造分析への適用をはじめて試みた点。また単に理論的提起のみならず、古代史料から以下に示す緻密な実証的な検証がなされている点は評価に値する。以下、Ⅰ～Ⅲの各論について述べる。

(3) Ⅰ部各論

まずⅠ部1. 2. 3章においては、戸籍に貫徹する年齢原理の探求がなされている。従来、戸籍からえられる年齢情報の信憑性については偽籍説が有力視されてきたが、統計学的手法を駆使し、原則として地域内婚が強く推奨される婚姻形態であったことを明らかにしている。

なかでも第3章は、理論的にも実証的にも本論の中核をなす章節である。そこでは編戸に貫徹する年齢原理と地域社会に存在した年齢（世代）階層の秩序と国家による戸籍編成がいかに関わっていたかが問題とされている。養老5（721）年の下総戸籍によってその親族呼称と年齢の相関関係の検討がなされた結果、40～41歳を「境界年齢」とし、それよりも高齢の「老人—配偶者」世代を「戸主—妻（刀白）」とし、より若い年齢（世代）の戸口成員を監督・指導させるという構造であったことを明らかにしている。すなわち律令国家は年齢秩序によって村落を支配していた事実が明らかとなったのである。

また1章において環境史的・人口論的検討がなされているのも注目される。これまで当該分野の研究では、W.W. ファリスおよび今津勝紀の人口統計学的研究が通説をなし、その批判的研究はほとんど存在していなかったものの、本研究に

においてはじめてファリス説・今津説の戸籍研究についての批判的検討がなされ、新たな論理が提供された。すなわち、これまで8世紀初頭は、アプリオリーに人口成長期とみなされてきたが、むしろ実態的には人口減少が顕著であり、それが気候寒冷化に起因する災害・飢饉・疫病により発生したという新たな議論を提起した点も注目される。

古代戸籍の「年齢累積論」は、岸俊男・南部昇・ファリスによる数少ない研究しか存在していないが、上記三者の方法とは異なる斬新な統計方法を提起することにより、年齢累積が造籍年ではなく、浮浪・逃亡の括出・隠首の画期となる政策が出された年度に発生している点を明らかにした点は注目される。年齢累積論は、偽籍論の定点となる基礎研究であるだけに、古代戸籍研究において本研究の意義は大きい。

本部における最大の実証的成果は、編戸の基本原則として、これまで戸籍研究において指摘されることがなかった年齢原理が存在していることを解明した点にある。それは古代の「老」の開始年齢である40歳を「境界年齢」として、各戸の戸主・戸口の編成形態が定められる戸籍編制秩序を示すもので、著者の世代階層制古代村落論の有力な傍証材料となっている。

(4) II部各論

II部の第1章～4章では、戸籍から一端離れ、地域社会の年齢（世代）秩序の内容・特徴に踏み込んだ分析がなされている。なかでも『万葉集』等に見られる「ヨチ」（第1章）「友」と「ドチ」に注目し、これらが「朋類関係」（ヨチ）、あるいは「同輩結合」（ドチ・第二章）という双方向・世代階層性村落にみられる重層的でインフォーマルな「同輩集団」としてとらえることができると説く。ここでは世代階層制村落論を、戸籍とはまったく性格を異にする『万葉集』などの史料から独自に論証を試み、戸籍研究の成果と整合させた試みといえることができる。すなわちI部の戸籍分析、II部の両研究の成果から、筆者の論理が実証的により説得的に論じられているように思われる。なおこうした世代階層制村落が住民相互の連帯に基づき「自立」した存在として発展しなかった背景には、人為的な編戸の分断効果、すなわち戸＝「三等親内親族集団」によって分断・抑制された結果ではないかとした。たしかに『万葉集』にみえる「サト」などは、首長制的支配秩序を体現する「村」、国家的支配秩序を示す「里」（国・郡・里制の里）

と明らかに異なるものである。「サト」はしばしば婚姻規制に関わる場面に登場するが、世代階層制村落は内婚制社会に特徴的な婚姻形態として知られる。もちろん日本の古代社会が内婚一色であった訳ではないが、こうした婚姻の在り方は世代階層制村落論に傍証を与え、また家族史・女性史研究における双系論との連携も期待できるものと評価できる。

(5) Ⅲ部各論

Ⅲ部の古代の土地支配論は、班田制論を従来の土地制度の枠内での議論にとどめず、古代の開田図のフィールド研究(糞置荘)の成果と結びつけ、地域社会(世代階層制村落)の実態と土地制度との相関を論じ、古代地域社会を構造的に把握しようと試みたものである。具体的には、古代の登録公田(口分田班給対象地)は、生益・死亡・逃亡・隠首による戸口の変動のみに基づいて授受する制度で、公田を固定的に把握し、割り付けるシステムであったこと。また貴豪族・有力農民層による新規開墾などの土地占有関係の流動化は想定されていなかったこと。中央政府や国司は、初期戸籍・田籍を通じて、戸主単位に受田面積(および四至)を把握するのみで、戸口数と受田額のみに関心があったことを指摘している。こうした日本の戸籍と「諸国公田」システムの特徴はⅠ～Ⅱ部で検討した世代階層制秩序を有する地域社会(サト)をタテ割に分割する形で「戸政」単位とした結果ではないかとしている。たしかに戸籍にみられる年長戸主や「妻」「母」「姑」などの年長女性による戸口への指導・服従の存在は世代階層の秩序を示唆しているが、「戸政」単位と世代階層制秩序のいずれがより規定的関係にあったのか、精密で具体的な論証が必要となろう。なお、古代国家はなぜ墾田の増加や口分田の荒廃化という土地耕作状況の変動にたいする対策を採らなかったかという点についてはⅠ部で論じられた7～8世紀における北東アジアにおける気象変動・人口変動との関連が想定されていて興味ぶかい。朝鮮半島・中国史などとの比較も残された課題といえよう。

審査結果と若干の課題

本論は全体に完成度が高く、課題の設定も戦後古代史学を十分に踏まえたもので、意欲的な論考と判断される。論の構成も過不足なく、実証も精密である。学界に公表されれば、高い評価をえられるものと思われる。ただ、敢えて指摘すれ

ば、Ⅲ部の班田制論における成果と、Ⅰ～Ⅱ部の戸籍研究や「ヨチ」「ドチ」論から導き出した世代階層制村落論との関係については、未だ理論的な見通しにとどまっており、両者を媒介する実証的な研究が課題として残されていると思われる。こうした点を考慮しても博士論文としては十分な水準にあると判断し、審査委員会は全会一致で合格と判断した。

付記

なお審査会は2015年1月10日専修大学生田校舎95A会議室において公開で実施した。参加者は本人・審査委員・本学他大学院生他20名であった。

Ⅲ 学位授与要記

一、氏 名	田中 禎昭
二、学位の種類	博士（歴史学）
三、学位記番号	歴乙第八号
四、学位授与の条件	学位規則第四条第二項該当
五、学位授与年月日	平成二十七年三月二十五日
六、学位論文題目	古代地域社会と年齢秩序—人口・集団・土地支配—
七、審査委員	主査 専修大学文学部 教授 矢野 建一 副査 専修大学文学部 教授 荒木 敏夫 副査 専修大学文学部 教授 土生田純之 副査 総合研究大学院大学文化科学研究科 教授 仁藤 敦史